

チェルノブイリとフクシマを結んで 支援と交流をひろげよう！

フクシマを核時代の終わりのはじまりに！

今年、チェルノブイリ事故から27年を迎えます。被災地では、まだまだ長期にわたる放射能汚染と健康のモニタリングが必要とされ、経済の回復、生活改善のための被災地の人々の様々な努力が続けられています。私たちは引き続き、チェルノブイリ支援と交流を続け広げたいと思います。現地では、「ノボ・キャンプ」（ロシアの非汚染地域への子どもたちの保養）の枠拡大などの希望も出ています。現地のニーズに合った支援を、被災地の皆さんと協議しながら進めたいと思います。

また、フクシマ事故から間もなく二年を迎えます。関西では、被災地のニュースもあまり報道されなくなっており、早くも「風化」が懸念されていますが、被災現地では問題は山積みです。決して風化させてはなりません。私たちは、フクシマの被災者の皆さんとの交流も深め、関西から連帯して何ができるか、ともに考え支援にも取り組みたいと思います。そして、関西でも大飯原発の即時停止を求め、全国の原発の再稼働を許さず、「原発ゼロ」と再生可能エネルギーへの転換をめざし、皆さんとともに運動に取り組みたいと思います。

原発推進のためにチェルノブイリの放射能被害を過小評価してきた国際原子力機関（IAEA）などの国際機関や原子力産業、日本も含め原子力を推進してきた世界の政府は、国際的にも繋がって、チェルノブイリの過小評価のみならず、それを利用してさらにフクシマの今後の健康影響を切り捨てようとしています。私たちはそのような危険な動きを許してなりません。

チェルノブイリとフクシマを結んで、「フクシマを核時代の終わりのはじまりに！」を合い言葉に、今年も皆さんとともに取り組みを強めたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



チェルノブイリとフクシマを結んで フクシマを核時代の終わりの始まりに！

「発足21周年の集い」が開かれる

昨年12月15日にチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の「発足21周年の集い」がドーンセンターで開かれました。会場にはベラルーシの交流相手・クラスノポリエから頂いた子どもたちの絵がかわいく飾られ、バザーのために購入したばかりのベラルーシの民芸品、それに手作りのマフラーなどが素敵に並べられ、救援関西の集会らしくムード満点になりました。

今回は代表の山科さんが入院中のために出席叶わず、メッセージを寄せて下さいました(メッセージは下記参照)。いつもの、元気な山科さんの姿が見えないと、やはり何かもの足らず淋しいものです。次はまた元気な姿を見せて欲しいと思います。



ベラルーシに代表訪問し、帰国早々の振津さんから事務局の報告が行われ、次いでベラルーシ訪問報告がされました(詳しくは p 参照)。現地訪問報告はスライドも交えながら行われ、生憎この集会の参加者が少なく、少人数で聞くには「もったいないような」貴重な報告でした。

今年の活動を振り返って、①「チェルノブイリとフクシマを結んで」ということで、4月にベラさん・バーリヤさん、8月にノボキャンプのアントンさんをお迎えし、福島を訪れ被災した方々と直接交流し体験と思いを共有した。このことは今後の相互交流の第一歩となった。②チェルノブイリ支援・交流ではチェルノブイリの子供達のノボキャンプ参加への支援、現地訪問そして各地で救援バザーを行なった。③フクシマ支援・交流では「ゴーゴーワクワクキャンプ」の被災地の子どもたちの保養支援に協力し、また関西で保養支援に取り組む方々と交流をした④これ以上の核被害をなくすために脱原発のための様々な行動に参加したことなどが報告されました。

来年はチェルノブイリとフクシマを結んで支援・交流を広げようと様々な提案がなされました。さらにチェルノブイリの被災地との交流を踏まえ、チェルノブイリの被害を正確に伝えること、IAEA等の原発を推進しようとする人々の事故の過小評価を批判すること、脱原発の取り組みにも積極的に参加することなどが提案されました。「フクシマを核時代の終わりの始まりに」の思いを強めた集会でした。

(いのまた)



ご挨拶

皆様

年末のお忙しい中、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西、発足21周年の集い」によるこそおいでくださいました。

長崎被爆者の山科でございます。今回は入院中のため、残念ながら出席が叶わず、書面でご挨拶させていただきます。

私は長崎で原爆に遭い、両親・兄弟を亡くし、独り爆心地で過ごしました。その後、原爆の悲惨さ・過酷さ等身をもって体験したことを「平和の種」ともなればいいと思い、学校での語り部やまた世界を回って訴えてまいりました。またチェルノブイリ事故を起こした4号炉の近くにも行きましたし、チェルノブイリ被災地で「ヒバク」の先輩として子どもたちを励ましたりもしてきました。

去年の3月に、起こってはならないはずの原発重大事故が、この日本のフクシマで起きてしまいました。ヒバク被害に苦しみながら、これ以上私たちのようなヒバクシャを作ってはならないと訴えてきたのに。ほんとうに悔しくてなりません。

チェルノブイリとフクシマの結びつきを強め、今度こそ、原爆も原発もない世界に向かって皆様と一緒に歩いてまいりたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西代表 長崎被爆者 山科和子

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2012.12.6～2013.2.11

佐藤龍彦 リュドミーラ・サーキャン 金山次代 奥平純子 荒川千恵子 尾上照子 田原良次 相沢一正
向井千晃 川添光代 遠山薫 旦保立子 小松裕子 松尾由美 安田寿夫 大野ひろ子 阪口博子 田村和子
白山勝久 碧海波留美 吉崎恵美子 即得寺 木村英子 奥谷恵子 齋藤充子 清水昭 陶山喜代子 佐藤みえ
中山一郎 桧山由美子 末田一秀 長澤由美 崎山昇 井上和歌 門林洋子 佐野明弘 杉本泉 小寺隆幸
川原重信 壺井進 尾崎浩子 長沢由美

(順不同・敬称略)



カンパ・会費納入のお願い

梅の頼りがチラホラと届きます。本格的な春の訪れが待ち遠しい今日この頃です。

皆様のお陰をもちまして、去年はチェルノブイリと福島被災者の相互交流の第一歩を踏み出すことができました。今年はその交流をさらに深めていきたいと思っております。また、お互いに支え合う関係をめざしながら、これからも被災者、特に子供たちの支援と交流に取り組んでいきたいと思っております。そして脱原発の運動にも積極的に参加していきたいと思っております。皆様に支えられての活動です。どうぞ、さらなるご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

2012年 ベラルーシ被災地訪問報告-その1

振津かつみ

2012年12月4～12日、ベラルーシを訪問し、支援やメッセージを届けてきました（日程は下記）。ミンスクのマリノフカ地区の「移住者の会」、モギレフ州の汚染地クラスノポーリエとチェリコフを訪問しました。ベリニチの寄宿学校はニコライ校長が入院中で、また時間が足りなかったこともあり今回は訪問しませんでした。

チェルノブイリとフクシマは、いずれも何百万人もの人々が、長年にわたる放射能汚染と闘いながらの生活を余儀なくされる「原発重大事故」です。「フクシマのこれから」に「チェルノブイリの教訓」を活かすためには、両者の類似点と相違点（社会体制、事故後対策の経緯、医療制度や診断基準、教育制度、等々の違い）をリアルに把握し、正しい情報と評価に基づき、今後の健康影響やリスクを推定したり、見習うべき対策と繰り返してはならない失敗などを学んでゆく必要があります。そのような視点から、前回訪問に引き続き被災者の皆さんに、健康のこと、教育のことなど、いろいろとお話しを伺いました。クラスノポーリエでは、事故後の除染や農業、林業の問題に詳しい人に会う予定でしたが、その方が急病で入院したとこのことで会えず、残念ながらこの課題は次回に持ち越しとなりました。

また、前号でもお知らせしましたように、昨年4月に、ベラルーシのチェルノブイリ被災地のベーラさんとバーリャさんとも交流して下さった飯舘村から福島市内に避難されているお母さんたちのグループ「いいたて子どもを守る会」と、その支援に取り組むNGO「エコロジー・アーキスケープ」の皆さんが、託して下さいました子どもたちの絵-Tシャツにふくらむ絵の具で描いた「わたし（ぼく）のなりたいもの」-とお絵描き会の写真も届け、被災地の子どもたちに紹介しました。



日程：

- 12月4日：関空発、夜10時過ぎにミンスク着
- 5日：ミンスク：ディミチク医師（甲状腺専門医）訪問
マリノフカ「移住者の会」と交流など
- 6日：マリノフカの学校訪問／バザー用品買い出し、クラスノポーリエ移動
- 7日：クラスノポーリエ：ソースチカ幼稚園／区長や副区長訪問／成人の障がい者センター／
子ども保護施設（プリユート）／小児障がい者センター
- 8日：クラスノポーリエ：学校／病院（院長、保健センター長）／里親の家庭訪問
- 9日：チェリコフ：バーリャさんのご家族を訪問
- 10日：クラスノポーリエ：救援物資の購入／ベーラさんと今救援・交流について話し合い
ミンスクに戻る
- 11日：早朝、ミンスク発
- 12日：帰国

チェリコフのバーリャさんの訃報

ご報告の冒頭に、皆さんに、とても悲しい辛いお知らせをしなければなりません。チェリコフのバレンチーナ・モロゾーバ（愛称バーリャ）さんが11月初めに急に亡くなりました。バーリャさんは、私たちの20年来の親友であり、彼女がいて下さったから私たちは被災地チェリコフの人々との交流を深め、子どもたちへの支援をすることができました。現地訪問の際には、いつもバーリャさんのお宅に泊めて頂き、ご家族全員で私たちをもてなして下さいました。これまでに三回、日本にも来て下さいました。フクシマの事故後、昨年4月には、クラスノポリエのベーラさんとともに私たちの要請に応えて来日して下さい、被災地をともに訪問し、フクシマの被災者の方々と心を通わせ、子どもを心配するお母さんたちの不安を受け止め、自分たちが事故後にどうやって子どもたちを守ったのか体験を話して下さいました。心から感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたいと思います。



とは言っても、未だにバーリャさんが亡くなられたことが「信じられない」「信じたくない」気持ちです。チェリコフのバーリャさんのお宅に行けば、また彼女が扉を開けてくれて、「よく来たね。お入りなさい。」と、大きな身体で抱きしめてくれるような気がします。バーリャさんは、私たちの心の中でずっと「生きている」のだと思います。

実は、今回のベラルーシ訪問の前からバーリャさんが「病気で亡くなられた」との連絡を私は受けていました。あまりにも急なことだったので、病状や経過をご家族からよくお聞きしてから皆さんにご報告しようと、お知らせが遅くなってしまい申し訳ありません。（12月15日の集会に参加された方々には、すでにお伝えしてあります。）今回、チェリコフのご家族、お連れ合いのバロージャさん、息子のサーシャさん、妹のターニャさん、そしてバーリャさんの実のお母さんにもお会いし、お悔やみを申し上げ、亡くなられた経緯についてもお伺いしました。10月の乳がん検診で早期乳がんがみつきり手術をしたそうです。乳がんの手術は成功したそうですが、術後の合併症として、以前からの持病の「下肢静脈瘤」が悪化し、そこにできた血栓が肺動脈に流れて「肺梗塞」を起こし急激に全身状態が悪化して亡くなられたそうです。ご家族にとっても突然のことで、バーリャさんの死を受け入れることができず、深く悲しみ、苦しんでおられるご様子でした。福島でお世話になった佐藤龍彦さんが託してくださったバーリャさんの来日時の写真をじっとみつめて涙しておられたバロージャさんの姿が忘れられません。

（帰国してから、ご家族が希望されていたバーリャさんのことを撮影したビデオを電子メールで送りました。）

深い雪の中、ご家族と一緒にバーリャさんのお墓参りに行きました。山のようにお花が供えられていて、生前にバーリャさんがどれだけ多くの人々に愛されていたかがよくわかりました。これからもチェルノブイリの被災者の皆さんとの支援と交流を続けること、そしてチェルノブイリとフクシマとを結ん

で、「核の被害のない世界」をめざして進んでゆくことを、墓前でバーリャさんにお約束して「救援関西の皆から、そして福島の皆さんからです」と、お花を捧げてきました。

ミンスク「移住者の会」代表のジャンナさんのお話から

まだまだ「楽ではない」人々の生活

ミンスクでは、「移住者の会」代表のジャンナさんのお宅に泊めて頂き、前回訪問以降の支援の状況や皆さんの近況をお聞きしました。

現在、ベラルーシでは、平均的な家庭の収入は（円換算して）月額 25,000～85,000 円くらいで、平均的な年金は月額 11,000 円ほど（人によって違う）。両親と子どもで暮らしている家庭での食費は、大体 25,000 円／月くらい、住居費 2,000 円／月（水道、電気、暖房は込み、電話は別）くらいなので、共働きでなんとか暮らしています。最近、他の国々からの支援もほとんどなくなってしまった中で、日本の私たちからの支援が会の活動の大きな支えになっています。

前回の資金援助で、3人の子どもの持つ11家族に新学年の学用品の購入のための支援を行ったとのこと。大統領令で3人の子どものいる家庭には国から住居費の支援があり（35%自己資金）、また国が電気代を払ってくれるようになっているそうです。しかし毎年、新学期に配布される必要物品のリスト（絵の具、鉛筆などの学用品の他、トイレットペーパー、水など）に基づいて、学年の始めには2,500～3,500円ほど支払わねばならず、また教科書の借用やノートの購入、給食費などで、毎月2,500円くらいはかかるとのこと。子どもが多い家庭はそれだけ負担も大きいのです。その他、14人の子どもたちに暖かい衣服、くつなど、7人に寝具、48の子だくさんの家庭にビタミン剤とサプリメント、27人の乳幼児にベビーフードと粉ミルクを支援したとのこと。

原発建設計画などの現状

リトアニア国境から数キロのグロドナ州のオストベックでは、24時間の突貫工事でベラルーシ初の原発を建設中とのこと。周辺の管理棟などはすでにできているようで、原発本体の土台部分を建設中らしい。15%はロシアの資金でロスアトムが建設。建設地はとても景色のいいところだそうです。ジャンナさんは個人的には原発はいらないと考えているのですが、原発の是非について公の討論が全くできない政治状況。原発を建設し稼働させた場合に出る廃棄物をどうするかという議論もあり、チェルノブイリ原発の30キロ圏内に処分場を作るという案も出ているとのこと。詳しい情報は国民には知らされていません。電力は石炭などで足りているのだそうです。

「チェルノブイリ事故から26年たって、大統領は放射能の危険はなく大丈夫と言っているが、セシウムの半減期は30年で、大統領といえども物理法則は変えられないのに…」とジャンナさんは嘆いておられまし



た。4月26日「チェルノブイリの日」に政府の政策に批判的な市民の集会やデモも行われているが、政府の監視と弾圧で、参加者は年々少なくなっているとのこと。チェルノブイリに関する写真展の計画が、政府の指示で中止になったことも最近あったそうです。

9月に国会議員選挙ありましたが、30%が再選、30%は大統領の推薦、残り5人は退役軍人など政府寄りのNGOやジャーナリストが議員になったとのこと。(退役軍人なども、政府寄りと反政府の二派あり。反政府派は候補者も出せない現状。) 経済的困難だけでなく、政治的にも人々の生活は、まだまだ難しいようです。

マリノフカの「第57学校」訪問

「ミンスクっ子」になった「移住者」の子どもたち—「差別」はない？

「移住者の会」の役員のガリーナさんの勤務している「第57学校」を案内して頂きました。この学校は校長先生もナローブリアからの移住者ということもあり、チェルノブイリ事故のことを子どもたちに伝える努力を熱心にされているそうです。ベラルーシでは、日本の小中学校と高校をあわせたような11学年の学校のシステムになっています。この学校では、全校生徒(11学年)500人、教職員は103人とのこと。移住者の先生が4人おられるそうです。「移住者の子どもは何人くらい？」とお聞きすると、「事故から20年以上経って今は『移住者』という言葉さえなくなっている。だれが『移住者』の子どもかもわからないし、統計データもないのですよ。」と校長先生言われました。「移住者」の子どもたちはすでに「ミンスクっ子」になってしまっているようです。事故直後には汚染地域の人々や移住者に対して、「いじめ」や「差別」もあったそうです。例えば、夏キャンプなどで、汚染地のゴメリから来たグループをミンスクの子どもグループが「チェルノブイリのハリネズミ」と呼んだりしたこともあったとのこと。「子どもたちは思いやりの気持ちがわからなかったからでしょう。大人になってからはそのようなことはありません。私たちも自分の息子や娘の結婚などで、気をもんだのですが、幸いそのような差別はほとんどありませんでした。市民は一般的には冷静に対応していると思います。」と、校長先生。

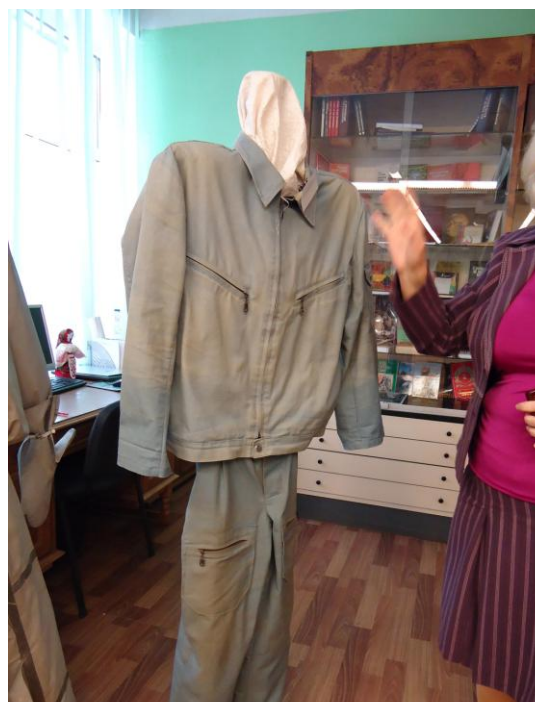
前日の「移住者」の会の会員の皆さんと交流した際にも、「結婚差別」のことが話題になりました。「日本生態系協会」会長の差別発言について移住者の皆さんに話しをしたところ「なんと恥ずかしいことを言うのか！福島の人々が抗議するのは当然だ。」と、大変怒っていました。福島の方々に「本当の愛情があればうまくゆくはず。心配しないでほしい。私たちの子どもたちは、イタリアやドイツの



人と結婚した人もいる。一度は親に反対されたが、結局、移住者の子どもと結婚したケースもある。」と口々に言われました。ロシア人の通訳のリュウダさんは「そこまでのヒバクシャ差別は、日本人の独特のメンタリティではないかしら…」との意見。真偽のほどはわかりませんが、「差別」の問題については、私自身、もっと歴史的な事実や社会的背景も含めて検証し、チェルノブイリ被災国と日本との比較なども含めて深めなければならない課題だと改めて思いました。(以前に、ロシアのチェルノブイリ汚染地のアントンさんに「差別」のことをお聞きした時にも、同じように「結婚や就職での差別はない」と言われました。)

チェルノブイリを子どもたちに伝える展示室

校長先生は、1986～89年には原発から30キロ圏のすぐ外にあるホイニキ地区で暮らしていて、その後ナローブリアに転勤したそうです。事故後に30キロ圏内の村々の学校の文書(75年間保管することになっている)を全て回収する作業をし、そのために「リクビダートル」(事故処理作業従事者)の証明も持っています。回収した文書は保管場所もなく、しばらく自宅の自分のベッドの下に書類を置いていたとのこと。夫は警察官で、事故処理にも関わり、今はチェルノブイリ省で働いています。夫の協力も得て学校の展示室に「チェルノブイリ事故に関する展示」を作ったそうです。大祖国戦争(第二次世界大戦)、アフガン戦争と並んで、ベラルーシ全体に大きな影響を与えた事件として、チェルノブイリ事故のことが展示されています。展示には写真などと一緒に、「リクビダートル」が着けていた衣服や防護マスク、線量計なども展示されていました。



ベラルーシでの放射線教育

ベラルーシの学校では「生活の基礎的な安全」という科目で、交通規則、火事などの避難、自然災害への対処などと並んで、チェルノブイリ事故や放射能について、また放射能からどのように身を守るかを教えているそうです。2年から9年まで、毎年、いろんなレベルの知識を習得します。日本の「国会事故調査団」の代表もこの学校を訪問したそうで、校長先生は代表団に使用している教科書を資料として渡したとのことでした。(教科書は市内の特別の書店でも入手できるとのことなので、後日、購入したいと思います。) 高校生向けの授業の先生用の参考書を一冊頂いてきました。内容は、エネルギー問題、放射線に関する物理・化学・生物学・医学などの基礎知識など、かなり詳しい本のようにです。(ロシア語のできる方に翻訳して頂いて、日本でも紹介できればと思っています。)

甲状腺専門医・ディミチク先生訪問

現在、福島県では「県民健康管理調査」で、事故当時18歳以下だった子どもたちの甲状腺超音波検査が進められています。事故後二年近く経っているのに検査がまだ半数にも達していません。また検査結果の本人や保護者への丁寧な報告がされておらず、子どもたちに「のう胞」が30%以上にみられていること、次回検査が二年後となっていることなど、さまざまな問題があり、不安も広がっています。

ベラルーシで、甲状腺癌治療の専門家として、診断や治療にあたってきたディミチク先生を訪問し、お話を伺いました。先生のお父さんは1992年に、チェルノブイリ事故後のベラルーシでの小児甲状腺癌に関する初めての論文を出された方で、私たちも10数年前にお会いしたことがあります。息子のディミチク先生も若い頃からお父さんと一緒に仕事をしてこられました。今は、医師の卒後研修の教育機関の責任者になっておられます。(今は臨床を離れてしまっていて、最近の臨床現場での超音波検査の所見などはあまりご存知ないようすでしたので、残念ながら私が知りたかった「のう胞」の件についての議論はあまりかみ合いませんでした。)福島での小児甲状腺超音波検査が2年に1回のスクリーニングになっていることを話すと、「ベラルーシでは年に2回やりました。1992年に始まった汚染地の子どもたち全員の大規模スクリーニング検査です。笹川基金によって日本人の専門家がやってきてベラルーシに導入したものです。それまでベラルーシではこのような検診制度はなく、医科大学などの専門家が各地を回って移動検診を行っていました。」と言われました。なぜ日本人の医者である私がベラルーシに来て、かつて日本の専門家が導入したベラルーシの検診について聞くのだろうと、ディミチク先生は「不思議そうな顔」をしていました。「笹川基金でベラルーシでの甲状腺検診をやっていた日本人の専門家」は、今、福島医大で「県民健康管理調査」を指導しておられる先生のグループのはずです。「2年に1回というのは、きっと経済的な理由でしょうね。」と、ディミチク先生は最後にポツリと言われました。

その他、ディミチク先生のこれまでの研究の成果をまとめたスライドも見せてくれました。5ミリ以下の非常に小さい結節でも癌のケースがあったことなどを示してくれました。肺転移の見つかるケースも多いが、全体として15年生存率は97%以上。小児甲状腺スクリーニングは、事故後に生まれた子どもたちを対象に今も続けられているようで、現在の小児甲状腺癌の頻度は事故前のレベルに戻っていないとのこと。「100万人あたり12~20人で推移している。」とのことで、これは日本や欧米で(スクリーニングをしていない集団での)小児甲状腺癌のデータ(100万人に一人)よりも10倍くらい高い。事故後に生まれた今の子どもでは、放射性ヨウ素の被ばくは考えられないので、「スクリーニング効果」も含めて様々な要因を検討する必要があるかと思います。すでに発表されている論文なども整理した上で、福島の子どもの甲状腺検査についてのコメントとあわせて、後日ちゃんとまとめてご報告したいと思います。(今回は、詳細は割愛します。)

クラスノポーリエ訪問

クラスのポーリエでは、区長や副区長を表敬訪問、ソヌチカ幼稚園、成人の障がい者センター、子ども保護施設（プリユート）、小児障がい者センターを訪問、学校で子どもたちとの交流、病院で院長や保健センター長と会談、親が親権を失った子どもたちを5人以上も里親として受け入れている家庭の訪問など、二日間でほんとうに沢山の方々とお会いしました。（今号では、紙面と時間の都合で「その一部」として、今回初めて訪問した「成人の障がい者センター」と、ベアラさんにお聞きしたとの子どもたちの健康状態についてのお話をご報告します。）

成人の障がい者センター

成人の障がい者センターは、二年前に設立されたばかりです。午前9時から午後2時までのデイサービス。18～30歳の障がい者が、10人ほど通所しています。センターに登録されている地区の障がい者は23人ですが、皆が毎日来るわけではないとのこと。若い障がい者にはセンターへの通所、高齢の障がい者にはヘルパーさんの派遣という二つのアプローチがあり、家でケアを受けている障がい者が4人いるとのこと。費用は無料。

紙や小さな木材を使って部屋に飾る壁掛けや置物を作るなど、手を動かす作業をしたり、遠足などの野外行事も行うとのこと。障がい者の方々の中には、詩を作ったりしている人もいます。若い夫婦で通っているケースもあります。昼食は弁当持ち。今は政府からの補助金をもらっているが、将来は自分たちで物を作って売ったりして収入を得られるようにしたいとのこと。皆さん、意欲的で、とても楽しそうな雰囲気で作業をされていました。



ソ連時代には、障がい者は18歳までは寄宿教育施設（インテルナート）に入り、その後、家で「障がい年金」を得て暮らしていたそうです。ソ連崩壊後、「障がい者の社会参加」の考え方が西側から伝わってきて、ベラルーシでも最近になって政策が変わり、このような施設が各地に作られ始めました。先生たちはミンスクで短期間の講習を受けるそうです。このセンターでは先生は3人。「通所者には技術を身につけてもらうだけでなく、それぞれの新しい希望を促し、常に自分の発達を促すように心がけている。」とセンター長は言われていました。



先生方は去年の私たちの支援金で、木版に焦げ目をつけて絵を描ける道具を購入できたと、とても喜んでいました。今年は、木片を様々な形に加工できるように、電動糸鋸がほしいとの要望があり、一緒に買いに行ってお付しました。「世界中で核被害が経験されている。日本では広島・長崎の経験があり、外国から来られる人々の中でも日本の皆さんは、ほんとうに実際的な支援をして下さっている。チェルノブイリの被災者として、フクシマの被

災者に深く同情している。」「自分たちも学びながら生き抜いてきた。常に前向きな考えを持って、放射能と立ち向かってゆきましょう。苦しみを知らない人々は他人の苦しきもわからない。」と、スタッフの皆さんが日本の友人たちにメッセージを送ってくれました。

ベーラさんのお話からー「普通の体育の授業」が受けられる子どもたちの割合は？

昨年、NHK がウクライナの汚染地域取材した番組で、「普通の体育の授業ができる子どもたちは 480 人中 14 人」という報道がありました。福島では、お母さんたちや先生方の中で「将来、福島の汚染地域でも子どもたちがそのような健康状態になるのだろうか」と健康相談などでも不安の声が聞かれました。クラスノポリエの小児科医ベーラさんにこの番組のビデオを一緒に見てもらって、コメントを聞きました。「少なくとも、クラスノポリエでは普通の体育の授業が受けられない子どもたちの割合はそんなに高くはない。ウクライナと基準が違うのかもしれないが…」と、クラスノポリエのデータを紹介してくれました。

ベラルーシでは、学校での検診の結果、下記のようなグループ分けをしているそうです。

- 1) グループ 1：体育の授業を受けることを禁止されている。先天性心臓疾患術後で心不全の症状あり、腎疾患など。
- 2) グループ 2：特別のリハビリ授業を受ける。心疾患などで運動制限が必要、小児麻痺などで特別のリハビリが必要。
- 3) グループ 3：予備グループ。運動制限をして経過を見る必要あり、制限解除カリハビリや運動禁止にするか判断する。

クラスノポリエ地区の子どもたちが暮らしているところは、チェルノブイリ事故によって今の福島の「中通り」（福島市や郡山市など）とほぼ同じレベルに汚染された地域です。表はそこでの 2012 年の検診の結果です。この結果を見る限り、ほとんどの子どもたちが「普通の体育の授業」を受けていることがわかります。

クラスノポリエ市内のある学校（ギムナジウム）を訪問した時にも、先生方に、体育の授業を制限しなければならない子どもたちの人数を聞いてみました。その学校では、全校生徒 527 人中、完全に体育の授業が受けられないのは 3 人（グループ 1）だけ。健康状態に配慮した授業を受ける子どもは（グループ 2 と 3）16 人で、このグループの子どもたちは、健康が回復すれば普通の授業に戻るとのこと。「ウクライナとは基準が違うのかもしれませんがね。」と先生が言われていました。

地区名	クリヤシク村	ゴロデツ村	ポチェプィ村	コジェーリ村
全校生徒数	58	31	61	102
グループ 1	2	1	1	1
グループ 2	1	0	3	3
グループ 3	2	2	5	4



←成人の障がい者センターの通所者たち。皆で紙細工のパーツを作る作業中。テーブル左の女性は詩を書くのが好きで、詩の大会で入賞した

』

↓ソーンチか幼稚園の子どもたち。



↑子どもの障がい者センターのセンター長さんと一緒に、地元の電気屋さんで、掃除機、プリンターを買い、センターに寄贈した。



←クラスノポーリエ市内の学校（ギムナジウム）の子ども達や先生方と。子どもたちは日本の子どもたちとの交流の機会を得た。



↑クラスノポーリエの区長さん副区長さんを表敬訪問。

「おめでとうと言わないで。この賞は世界からの連隊激励のメッセージ」

振津かつみ「核のない未来賞」受賞を祝う会

昨年、当会事務局の振津さんが、ドイツの NGO フランツ・モール財団から「核のない未来賞」を送られ、2013年1月12日、受賞を「祝う会」が開かれました。

振津さんは、私たちと共に活動しているチェルノブイリ・ヒバクシャとの支援・交流だけでなく、30年来の広島・長崎の被爆者の国家補償にもとづく被爆者援護法制定のための運動に参加し、また被爆者の健康に関する研究や、2011年からはフクシマ事故の被災者の健康保障を求める活動や被災者の健康相談も行っています。国際的には、ICBUW（ウラン兵器禁止を求める国際連合）の評議員としての活動や、チェルノブイリ国際医学委員会に参加し IAEA のヒバク過小評価への批判も行っています。またウラン採掘の犠牲となっている先住民の人々とも交流も重ねてきました。



従って、祝う会は、総勢 150 人あまり、それぞれ別の方面で振津さんと一緒に反核運動や研究や支援活動をしてきたいろいろな方々が、一堂に会し、一大交流会の様相でした。

まず、主催者を代表して科学技術問題研究会の稲岡さんの報告で始まりました。ビキニ水爆実験、キューバ危機、「部分的核実験禁止条約」等、「核破滅」と人類生存の危機との闘いが反核運動の原点であったこと、核の本質を再確認させられました。次に振津さんの記念報告でした。きっと内容は言いたいことの数%しか話せなかったと思いますが、想いは伝わりました。

以下は振津かつみ受賞記念報告「核のない未来をめざして前進しよう」の一部です。

今、フクシマ原発事故の被災地では 400 万人が、いわゆる放射線管理区域のレベルの汚染地に居住しています。世界のヒバクシャと手をつなぎ、「核のない世界」を作っていこうとする私たちの想いとギャップのある現実がそこにあります。

今回のこの賞は、私個人に与えられたものではないと思っています。私たちの活動の重要性が世界的に評価されたことは大事だが、おめでとうと言われても喜べない現実がある。フクシマの課題を前にして与えられた賞。ここに意味があります。この賞は日本の反核運動・ヒバクとの闘いに、期待を込めた世界からの連帯激励のメッセージでもあるということです。私たち一人一人が自覚的にこの一翼を担って行く責務と決意が問われています。

ヒロシマ・ナガサキを経験した日本で、チェルノブイリを経験した世界で、さらなる核被害であるフクシマが起こるのを私たちは止められなかったという現実を見据えなければなりません。核を利用する人々は必ずヒバクの過小評価、隠蔽、ヒバクの強要を進めていきます。ヒバクの被害は健康だけではない。被害は世代を超え人間の生活（社会・経済・文化）全体に及びます。このことは広島・長崎・チェルノブイリの経験から明らかです。

ヒバクによる健康被害・後障害についての、個々の症例での因果関係の証明は必ずしも容易ではありません。未解明な部分と明らかな部分があります。被害者の側に立ち、共に進むことが必要です。被害者と加害者がいるとき、中立はあり得ません。運動の中では信頼関係のある、顔の見える関係も重要です。ローカルな問題とグローバルな問題を結んで取り組むことも重要。科学的評価における観念論と闘いつつ、同時に社会的課題と結んで考え、とり組むことが、科学者としての社会的責任・歴史的使命であると思っています。

核のない未来をめざしてともに前進しましょう

続いて、振津さんが14年間臨床医として診療にあたり、広島・長崎の被爆者の健康調査も行った阪南中央病院の医師から、研究者から、広島・長崎から、反原発の市民団体から、福島・宮城から、福井の原発立地点から、等等発言をいただきました。総勢30人弱、時間制限のあるリレートークですが、もっと聞きたかった事ばかりでした。

原発はごめんだ広島市民の会の木原さんは電気料金の値上げは原発を維持するためのもの、とタイムリーな提案、値上げ反対を訴えました。長崎の二世の会の崎山さん、福島県教組の国分さんと続き、宮城県護憲平和センターの菅原さんは、復興の声と共に分断も現れ、1ベクレルにこだわって具体策が立たず未だに家を建てる所も決まっていない現状を報告され、関西に住む者として思いが一番心に刺さりました。ICBUWの嘉指さんは、2007年から4回の国連決議がされたがウラン兵器の禁止には至っていないことを報告、国際的な活動の意義と難しさが伝わりました。福井の松下さんは、雇用不安がある立地点で、あえて脱原発元年と掲げ、原発がなくなった後の生活をデザインし提唱しました。ドイツに見学に行くそうです。チェルノブイリ子供基金の小寺さんは保養の権利を公的なものにしていく取り組みを報告されました。宝塚の井上さんは食の安全の取り組みを話されるかと思っていたら、市民発電所なるものを作って運営しているとのことでした。

静かで近づくと熱い振津さん。振津さんの活動の幅は広く、それぞれ各方面の方々の取り組みは個別的で具体的で自立的。だが目的と方向は同じ。

国会を取り巻くデモによっても原発は止まらず、年末の選挙結果は自民党の圧勝。この反動の時代に、どう立ち向かうか。「祝賀会」ならぬ「一大交流会」では、ネットワークのような交流ができ、また一つの力になったようです。私は厳しい環境で粘り強い取り組みをされておられる方々を知って元気をもらいました。



言うなというけど、やっぱり振津さんおめでとう！献身的な活動にいつも頭の下がる思いです。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西も新しい一歩を模索していきましょう。(ゆみ)

橋本真佐男さんを偲ぶ会

・2013年3月24日(日)2時~4時30分 (1時30分開場)

・芦屋市民センター 203号室(60人) 659-0068 芦屋市業平町8-24 Tel.0797-31-4995

「救援関西」の運営会議にも参加され、特に若い人たちにいろいろとアドバイスをして下さった橋本さんが他界されました。深い感謝と共に謹んでご冥福をお祈り致します。橋本さんの友人・後輩・教え子の方たちでの「偲ぶ会」の案内をさせていただきます。気楽に自由に参加くださいとのことです。

会計報告（2012年1月1日～12月31日） * 26周年交流企画特別会計は別途報告済

1. 救援・交流会計

収入	カンパ	745622
支出	現地訪問／救援物資購入等	317101
	現地訪問／通訳謝礼・交通費	134991
	現地訪問／宿泊・交通費	43129
	保養に補填	115676
	26周年交流企画に補填*	492830
	小計	1103727
収支		-358105
繰り越し		797242

現在高 349137

2. 保養支援

収入	カンパ	62200
支出	ノボキャンプ交通費支援	177876
収支		-115676
救援会計より補填		115676

現在高 0

3. フクシマ支援・交流

収入	カンパ	412801
支出	ゴーゴーワクワクキャンプ・カンパ	106000
	アントンさん福島訪問・滞在費	58135
	小計	164135
収支		248666
繰り越し		180814

現在高 429480

4. 運営会計

収入	会費・カンパ等	515160
支出	ジュラブリ他送料	187870
	印刷費	101300
	絵額縁代・送料	19990
	救援バザー物品購入	20572
	その他	4220
	小計	333952
収支		181200
繰り越し		3864

現在高 185064

